

Title	一九〇五-一九二一年のドイツ社会民主党史 : Schorske, Berlauの二つの研究書より
Sub Title	The history of the German social democratic party, 1905-1921 : an epitome and brief review on Carl E. Schorske, "German social democracy, 1905-1917" : a Joseph Berlau, "The German social democratic party, 1914-1921"
Author	正田, 庄次郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.11 (1959. 11) ,p.971(37)- 984(50)
JaLC DOI	10.14991/001.19591101-0037
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591101-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第 10 表 製鋼部門労働人員 (人)

企 業	昭 27	28	29	30	31	32年末
1	3,419	2,956	2,695	2,554	2,624	2,598
2	2,266	2,069	1,824	1,877	1,822	1,840
3	2,265	1,971	1,853	2,053	1,911	1,749
4	940	1,362	1,116	1,316	1,310	1,327
5	1,748	2,045	1,718	1,735	1,958	1,976
6	350	514	1,076	1,238	522	520
7	591	847	662	661	503	654
8	825	451	482	597	634	532
9	504	384	373	331	340	336
10	237	226	212	275	233	281
11	311	283	275	245	245	243
12	415	410	375	272	278	350
13	160	171	144	172	164	170

(注) 出所は鉄鋼連盟「製鉄事業参考資料」昭 27~32 年版



一九〇五—一九二二年のドイツ社会民主党史

—Schorske, Berlau の二つの研究書より—

正 田 庄 次 郎

(1)

われわれはいま、この地球から戦争をなくし、恒久平和をうちたてることができるかどうかの、長い試練のまえに立っている。戦争が人類の宿命としてうけとられ、恒久平和が人類の夢であったこと、いまなお、夢であることを考えるなら、われわれがおかれていた時点が、いかに世界史の流れにおいて画期的なものであるかわかる。また、マルクス主義的な立場に立てば、平和を維持し、戦争をなくすということが、社会主義の実現と切り離しては考えられなかった、わずか十数年以前のことを想起するならば、このことのもつ意義、影響の奥ふかさは想像を絶するものがある。このような可能性を生んだいくつかの要因の中において、社会主義の比重の増大という事実がその基調をなしており、今後とも基調をなしてゆくとするれば、社会主義の問題の重要さは、好むと好まざるに拘わらず、ますます大きくなってきたといえよう。

一九〇五—一九二二年のドイツ社会民主党史

こうした歴史の大きな流れのうえに立って、社会主義と社会主義運動を、あたらしく再検討すべきときに来ている。理論の重要な一つの機能が、人類の進化のプロセスにおいて、その苦悩をできるだけ少なくし、的をいたものにするにあることを考えれば、このことは理解されるであろう。これは、社会主義に未来をみようと、あるいは批判的態度を持つと、今日の大きな変化につながる、歴史的素材をふんまえて、批判と肯定の論理を緻密にし、論証をふかめなければならぬということを含んでいる。いま日本の社会党がなめている苦悩も、日本の労働運動が当面している問題も、さらには共産主義運動がイデオロギーの分野で展開している現代修正主義批判も、当事者の目先の政治目的、問題意識の程度はあくとして、長い目でみるならば、こうした歴史の変動を基調とした、長い過程の一つとみることができないであろうか。

このように考えると、ドイツ社会民主党の歴史は、新しい関心をそそらずにはおかない。それは、マルクス主義のリアリティを検証

三七(九七一)

する、豊かな歴史的素材の一つとしてである。こうした個別的で具体的な歴史の検証を通じて、社会主義の再検討は、奥ゆきのふかいものとなるであろう。マルクス主義のリアリテイという目で、ドイツ社会民主党の歴史をみる時、どのようなことになるか、非常に興味のもたれるところである。

本稿では、戦後の研究書から、アメリカの著者のものを、そしてつながりをもった年代を扱ったもの二冊をえらんだ。著者の問題意識、素材のつかみ方、結論、こういったものをできるだけ忠実に紹介したいと思う。

本稿(2)で紹介されるのは、Carl E. Schorske; German Social Democracy 1905-1917, The Development of the Great Schism, 1955. であり、(3)で紹介されるのは、A. Joseph Berlau; The German Social Democratic Party 1914-1921, 1949. である。

(注一) 「理想」(一九五九年六月号)の「ソ連をめぐる現代の修正主義」という論文の中で、加藤寛氏は、「われわれのみるところでは、現代の修正主義論争は、政治的な意図をもって、『作られたる』修正主義論争である」と断言している。しかし、これは少し、「政治的」な断定にすぎないように思える。

(注二) (1)戦後の、ドイツ社会党史研究書のうち、Peter Gay; The Dilemma of Democratic Socialism, Eduard Bernstein's Challenge to Marx, 1952. は見逃すことのできないもの

程を、分裂の発展過程としてみる。

第一部——(一九〇五—一九〇七)

一九〇五年のロシア革命の衝撃を、どのような実情のうちに党はうけたか、これをエルフルト綱領(一八九一年)のもつ意味と、改良主義の急速な抬頭の二つの面から明らかにする。エルフルト綱領は「共産党宣言」の資本主義発展の傾向法則を確認した革命的な側面と、ゴータ綱領をひきついで、資本主義のわく内で改良してゆくこととする面の二側面をもち、革命主義者と改良主義者がそれぞれの側面をうけついでゆくとみる。^(注四) 改良主義の抬頭は、南ドイツを中心とする、地域的後進性のうえにたつて発展してきたもの^(注五)と(フォールマールの演説に代表される)、当初社会主義政党内によって育成された労働組合が、一八九五—一九〇〇年の間に力関係を逆転させ、改良主義の支柱となるに至ったもの、の二つが指摘される。労働組合は、その勢力拡大と共に、日常利益の追求に存在理由を定め、組合の成果を革命前進の手段としてではなく、それ自体を目的と考えた。一九〇〇年迄には、組合の政治的中立は絶対化しており、「二柱論」(労働組合—経済的機能、党—政治的機能)が大勢を制していた。こうした改良主義の抬頭の中で、ベルンシュタインの理論が、フェビアンの影響を身につけて登場する。このような、改良主義と修正主義の抬頭は、党組織論にも反映し、新規約は中央集権を貫きながらも、州組織に大幅な自治を認め、これが後に左派反対の拠点となった。

一九〇五—一九二二年のドイツ社会民主党史

のであるが、この紹介は別の機会にゆずる。

(2)ドイツ社会民主党史の戦後研究については、林健太郎氏が、「現代社会主義の再検討」(中央公論社)の五一頁でふれている。また飯田鼎氏も、「三田学会雑誌」第五十二巻四号六四頁でふれている。

(2)

Schorskeは、「大分裂の発展」の副題がしめすように、本書を^(注三)の五つの部分にわけて、経過的に分析している。

- 第一部 挑戦された改良戦術(一九〇五—一九〇七)
- 第二部 右派の強化(一九〇六—一九〇九)
- 第三部 立憲的改良のための二つの戦術(一九〇九—一九一〇)
- 第四部 深まる危機と急進派の再強化(一九一一—一九一四)
- 第五部 壊滅

著者は、今日全く性格を異にし、互いに敵として争っている社会民主党と共産党は、同じ起源をもっており、なぜちがった道を歩むようになり、どんな経過を経て分れていったのか、また戦前の党が、どのように第一次大戦において労働運動を分解させ、その後のレーニン主義の拡大をたすけたかに答えることが研究の目的であるとする。この場合、改良主義の抬頭が分裂の原因であるという通説を拒み、改良主義が理論面から、革命主義が実践面から、旧党のしだいに現実をそぐわなくなっていった伝統をほりくずしてゆく過

こうした中でロシア革命の激動をむかえるが、当時すでに労資は、互いに組織をととのえての本格的な闘争をくりかえしており、争議件数は未曾有の数に達していた。反面で、資本家のロックアウト戦術の採用は、財政と組織保持の点から組合指導者の保守性を強めた。また党内の急進派は、修正主義との闘いにつかれ、革命的行動によって党の臍皮をのぞもうとしており、西欧各地のゼネ・ストは、非常な感銘を与えた。ロシア革命は、急進派をばげまし、集団スト是否の論議は、いかにこれを行なうかの問題にかわった。集団ストを、組合の組織と財政を危くするものとみた組合指導者は、一九〇五年五月の定期大会で、これに反対し、党内急進派への闘いを宣言する結果となった。急進派は「tag」大会(一九〇五・九・二七)で勝利を挙げたが、一九〇六年二月には党執行部が組合の全国委と秘密協定を結んで、集団ストの阻止を正当化した。かくて、Madsen大会(一九〇六・九・二三)で、急進派の勝利は逆転し、逆に党の組合への従属の道がひらかれた。一九〇五年の経験が党急進派にのこした遺産は、第一に、一九〇六年の組合との秘密協定、Madsen大会での態度がまねいた党執行部への不信であり、ここに一九一一—一九二二年の謀叛の種がまかれた。第二に、ルクセンブルグの「集団ストライキ、党、および労働組合」に結実したところの、ロシア革命から学んだ急進的な戦術であり、これは党の伝統に対する左からの攻撃をいみした。

一九〇七年の選挙の敗北(八一議席から四三議席へ)は、政府の

三九 (九七三)

世界政策の勝利としてうけとられ、国家と民族に対する態度はいかにあるべきか、という新しい問題を提出した。外交問題、戦争・平和の問題を、党がはじめて本格的にとりあげたのは、Main大会(一九〇〇)で、リープクネヒトとアイスナーがこの問題にとりくんでいた。しかし、Main大会(一九〇六)では、ペーベルは軍国主義反対活動強化の、リープクネヒトの提案に強く反対し、急進派との溝を深めた。ペーベルの国会演説にみられるように、執行部は、反国家的という、党の「汚名」をそそぐ努力をしていた。また、第二インターナショナルの Stuttgart大会(一九〇七・八)でとった、ドイツ社会民主党の態度は特徴的であった。即ち、集団ストライキで戦争を阻止するという案を強硬に拒み、国際的会合において、はじめて保守派の指導者として登場し、Main大会(一九〇六)で確立されたトリオ(組合主義者・修正主義者・執行部)がなにを示すかを明らかにした。

(注三) Schorske は、戦略業務局(O.S.S.)ドイツ調査班で仕事をしていたが、いまは Wesleyan University に奉職している模様。

(注四) のちに紹介する Beriau もエルフルト綱領に対して同じ見方をしている。これに対しコールは、革命を達成する方法について語ってないのを、エルフルト綱領の弱点とみている(G.D. H. Cole; The Second International, p. 255)。

Michels のこの面の研究は、党の官僚化と党分裂との関係を説明するには不十分であるとする。

一九〇五年以前は、党の合理的中央集権的組織は確立されておらず、ビスマルク時代は全国指導は国会議員の手ににぎられ、執行部は行政管理より政治宣伝に関心をもち、一九〇六年までは組織の実態も知らず、地方党組織からの報告もなかった。下部機関の実態は千差万別であったが、一九〇三年の選挙の勝利と対修正主義闘争はしっかりした組織の要求となり、一九〇四―五年の新規約となった。新規約は、形式的には中央集権の強化を主張した急進派の勝利のようにはみえたが、実際には、その後の発展が示すように、執行部の対急進派闘争の武器となった。即ち、一つには、各選挙区を単位とする党の基礎組織が、全国執行部と、地方中間組織で決定された事を遂行するだけの機関となり、執行部と地方中間組織は下部とのつながりを欠いていった。これは、地方中間組織が空白地開拓のためにつくられたことと相まって、保守的傾向をつよめ、都市の急進派に反対する拠点となるに至ったのである。いま一つは、一九〇五年の執行部の有給書記採用にはじまり、エーベルトによる各級機関の有給書記網の整備を通じての官僚化であった。レーニンの職業革命家集団とちがひ、それは他党との競争、党員と投票者かくとくを目的にしており、しかも右派強化の時期にその整備が行なわれたことは、党内の争いに中立であるような形で官僚化を促進させた。この二つの面から党機構が急進派チェックに活用されたのである。

(注五) コールは、各州の事情の相違を非常に重視している(Ibid., p. 251, p. 258, p. 299)。

(注六) コールも、フェヒアン協会の影響を強調しており、社会主義の転化の方法については Shaw との類似を指摘している(Ibid., p. 277) とのまた植民地政策については Shaw との類似を指摘している(Ibid., p. 293)。

第二部——一九〇六―一九〇九

この時期を、現象的には休戦、実際的には改良主義の党支配確立の時期とみる。そして、改良主義の党支配確立過程を、労働組合の影響の拡大の結果の側面と、党の組織構造自体の結果の側面から明らかにする。

この時期は、Bielefeld ブロックの強硬政策が修正主義的戦術の余地をなくさせたが、同時に不況により、労働組合の活動をも沈没させ急進派戦術の妥当性もうばった。まず、労働組合と党との関係という点からみると、労働組合は急進派の力の源泉である、メーデー問題と青年運動に攻撃を加えその力をうばった。この頃、加盟員数の点で、党と組合の比重は一対四の割合になった。ここで急進派内に微妙な変化があらわれる。即ち、ルクセンブルグが二〇世紀の革命を一れんの大衆的暴動の形態としてみたのに対し、カウツキーは、「権力への道」で、支配階級の道徳的衰退を重視し、自然崩壊論を基礎に、受動的態度を強調し(エルフルト綱領への復帰をいみする)、微妙な相違をみせるに至った。

改良主義の党征服に力をかした党機構の問題では、Weber と

また、執行部に対する党大会の抵抗が、なぜ結局において挫折したかを、党大会の構成の面から解明する。会議運営を通じてという点を別にすれば、党組織の弱い所(小都市や農村)も強い所(大都市)も同じ三名の代議員を選出したため、前者に不当な力を与えたこと、さらに、一九〇九年の比例代表制の部分的採用にも拘わらず、一九一一年の大会では大都市が五、七〇〇人に一人、小都市が五七一人に一人の代議員を出し、四、〇〇〇人以下の組織が代議員の過半数を占めて執行部の支持層となった事実を指摘する。このように、民主主義を信条とする改良主義の党支配は、皮肉にも非民主的党運営が大きな役割を果たした。

第三部——一九〇九―一九一〇

この時期は、Bielefeld ブロックの解体により、改良主義者が力をえた時期である。Bielefeld ブロックの崩壊をみるや、修正主義者は革命的孤立からの脱却、改良をめざす他党とのいけい主張し、急進派は、かりに民主化がすんだとしてもそれが反帝国主義の力を強める事になるかという点に疑問をもち、慎重な態度をとった。まして、Stuttgart 大会で戦争と植民地主義に対する強硬決議に強く反対した修正主義者と組合主義者が、国内問題優先を主張する時、急進派は否定的に反応せざるをえなかった。ドイツのおかれた社会的・経済的・政治的事情が、すっきりした戦術を許さぬ最大の原因でもあった。

一九〇九年の Leipzig 大会はきわめてあいまいな態度をとった。

租税問題では、結局国会議員団に委任した形で修正主義者の勝利となり、自由党とのいけい問題では、これを拒んだ Bebel 決議を採択したかと思ふと翌朝これを否決するといった工合であった。こうして、改良主義者は Bülow ブロック崩壊後の新情勢に必ずる党政策調整の、第一段階で勝利をおさめた。

しかし、Bülow ブロックの崩壊によって政府が公約したプロシヤ選挙法改正は流れ、プロシヤをはじめ各州にはげしい選挙法改正の大衆闘争が展開された。そのための戦術をねるプロシヤ党会議では、自由党とのいけい、温和な戦術をとくベルンシュタインの説得にも拘わらず、会議の空気は急進派に味方した。加えて、一九一〇年二月四日の Bechmann-Hollweg のきわめて不十分なプロシヤ選挙法改正案発表は、広汎なふんげきをまねき、しかも、プロシヤ議会の審議においては、ベルンシュタインの予想を裏切り、自由党は独自の立場をとって保守党に中央党の多数で草案を通過させた。

こうした選挙法改正をめぐる闘争とともに、一九一〇年は、労働争議もはげしく、Kauftfeld 炭坑争議には軍隊の出動をみた。一九〇五—六年を想起させるかかる空気の中で、大衆はマス・ストライキの使用をのぞみ、その討議を要求した。ルクセンブルグは、この運動の指導権にぎり、マス・ストライキを含む戦術の討議とその採決を要求する論文を Vorwärts におくった。Vorwärts はこれを拒み、Neue Zeit もそれに従った。これを契機にルクセンブル

グとカウツキーの戦術の相違は表面化し、カウツキーは急進派を離れて中央派の立場を確立するに至った。理論的には中央派の中間的立場は存在したが、現実にはつぎの国会選挙にすべてを托したことによって修正主義者はげますことになった。

急進派内の内紛に力を与えて、修正主義者は既成事実の作成、全国への影響の波及を計算にいれ Babel において予算案賛成に投票した。これに対し、中央派は規律違反を非難し、急進左派は修正主義者の復活を党政策の産物と断じて、党政策全般への攻撃に転じた。Magdaburg 大会 (一九一〇) では、プロシヤ選挙法改正問題では急進左派が中央派とくんで修正主義者と対抗するというように、三ツ巴を演じた。

かくて、この時期の後半は、支配階級の非妥協的態度、改良主義戦術の失敗により、革命的希望が再興し、ルクセンブルグを中心に分派形態が形成されていった。党指導部は、中央派と共に両者の中間の立場をとり、国会選挙にすべてを托した。また執行部は、急進左派を押えるため党機関紙誌に圧迫を加え始めた。

第四部——(一九一一—一九一四)

モロッコ事件で執行部が示した態度は、危機の過少評価であり、極めて消極的であった。反帝闘争より選挙を重視するといった内容の Molkenbaur の手配がルクセンブルグによってばくろされたことと、労働組合全国委の依頼で、組合に対する攻撃を弱めるように

との「秘密回状」が地方組織指導者に流されたことがバクロされたことで、執行部は苦境に立った。もつとも決定的な時に執行部の実行能力が問われたといった印象は免れなかった。しかし、一九〇六年には組合主義者を党規律に従わせるために闘ったのに、一九一一年には指導部に対する発言の自由のために闘った事実のうちに、この間の左派の力の変化がよく示されていた。

Jena 大会 (一九一一)、Chemnitz 大会 (一九一二) では機構改革が重要な議題となり、結局は急進派の改革案は失敗に帰し、一面では執行部の強化、他面では新党会議という形で修正主義者の連邦主義が実現をみるに至った。

一九一一—一九二二年のこの党組織改正運動は、分裂の発展を示す一里塚であった。一九〇七年には戦争と帝国主義の問題は政策問題として争われたが、一九一一年には党内権力の問題、組織統制の争いにかわり、この中で急進的反対派は再編成された。即ち、中央派役員同様 Kautsky, Hilferding, Lipinski は反執行部運動の局外に立ち、中央左派の国会議員 Ledebour, Dittmann, Hoeh, Stadthagen, Albrecht, Emmel が指導権にぎり、Eisenacher (一九一二年六月六日、急進派が独自の党組織改革案をねるため Eisenach に集まったことからこうよばれた) とよばれる一団が、後に独立ドイツ社会民主党 (USPD) に発展する議会反対派の中核となった。

Jena 大会 (一九一一) で、改良主義的選挙戦術を大幅に採用

一九〇五—一九二二年のドイツ社会民主党史

し、執行部がすべてを托した一九二二年の選挙結果は、反 Babel 派が多数 (社会民主党一一〇、自由党一四四、進歩党一四二) をしめたことでは成功であったが、進歩党の支持者の多くが決戦投票で社会民主党よりも保守党をえらび、中産階級の離反を示したこと、および軍国主義政策と世界政策に対する各党の見解の相違は、その後の困難を予想させるに充分であった。事実議長選挙で早くも自由党の右傾化があらわれ、社会民主党、進歩党は少数派になった。また外交政策の面でも何らの変更をしる力もなかった。党内の、自由党とのいけいを主張した人は困惑し、急進左派は資本家政党に対する無原則的な態度の結果としてこれを攻撃した。

急進左派は、軍国主義と帝国主義の問題が政治生活の軸であるという現状認識から出発して、マス・ストライキ、大衆行動の運動方法、帝国主義・戦争反対の優先を軸にして理論と実践の統一を行なった。かれらの大衆行動観は、一面では帝国主義観と結びついていしたが、他面では、大衆の自然発生的行動力に無条件の信頼をおくその大衆観と結びついていた。革命を組織することに注意を向けない点でレーニンのそれと鋭く区別された。

こうした急進左派の見解は、党の諸政策と妥協しがたいものであり、抗争は下部組織に波及すると共に、急進左派の新たな結集を招いた。一九一三年十二月にはルクセンブルグ、メーリング、カルスキらは社会民主主義通信を発刊した。執行部もまた右派に対し寛大で左派に対してきびしい規律統制を開始した。

第五部

一九一四年八月八日の戦争信任は、第一次モロッコ事件のさいの態度、一九〇七年選挙の敗北に対する反応、一九〇七年の第二インターナショナル大会での行動、第二次モロッコ事件のさいの態度、一九一三年の租税案賛成投票の一連の行動の発展にすぎなかった。執行部も組合幹部も弾圧をおそれ、ロシアに敗れることをおそれ、戦争反対によって労働者階級の支持を失うことをおそれた。執行部が戦争を反執行部闘争の抑圧に利用し、規律統制の強化をもつてのぞんだことは分裂に拍車をかける結果となった。さらに一九一四年八月五日に予定されていた党大会の無期延期発表は組織的分裂をはやめた。

しかし、こうした中で、急進左派と中央左派の分裂も再燃し、対立抗争は一九一七年一月までつづいた。

一九一六年の、軍事的行詰り、経済的困難からくる政府への不信の増大、執行部の政策に対する信頼の喪失、改良主義の破綻、それに加えて、党保全のための反対派排除の方針は、ついにスパルタクス団と中央左派との合流による、独立ドイツ社会民主党を結成させるに至り（一九一七年イースターの日）、組織的にも社会民主党は分裂した。

独立ドイツ社会民主党 (USPD) は、右に Kautsky, Bernstein, Wurm、左にスパルタクス団を配し、その間に大部分が位した。ゴータで採択された綱領は、エルフルト綱領の再現である点、スパル

タクス団の不满を買ったが、USPDの多数の最大関心事は、伝統的な、反対政策の復活であり、社会革命をなしとげる意志はなかった。組織問題についても、中央左派は適度の分散と非官僚化を主張し、スパルタクス団は中央左派以上に反官僚主義、反中央集権主義であった。スパルタクス団のこうした主張のかけには、中央左派への不信と、いままでの経験が生んだ組織そのものへの不信が重なりあっていた。またスパルタクス団の革命理論そのものが組織軽視を生む点も重要である。エルフルト綱領の復活によって採用された純粹な反対政策は、当時の情況に合致し、大衆的ストライキと結合して革命的空気をつくったが、反中央集権、反官僚主義の組織は、自然発生的な大衆行動を単一の政治的力に統一、団結さす力を自らうばう結果となり、レーニンの指導との対照を示した。

以上の分析のさいごに、著者は、結論にかえて、分解した社会民主党から、今日の共産党への変質 (transformation) の問題にふれ、つぎのように結んでいる。

共産党と戦前の社会民主党急進派の間には、革命・社会主義を通じての人類の救済という考えの共通点はあるが、それに至る手段の点ではちがっていた。しかるに、戦争・革命を通じての体験は、旧社会民主党の資本主義擁護の性格と、革命の形態としての大衆行動、マス・ストライキ、労働者兵士委員会とを教えた。さらに一歩すすんで、この委員会の徹底した民主主義に、急進派の自然生長的革命論の集中的弱点が存在する事をしめし、権力奪取を唯一の目的

とした意識的戦略と中央集権的指導の問題が提起されるに至った。これは従来の急進派の民主主義の信条と革命観を動揺させずにはおかず、一九二〇年六月の第三インター加盟交渉となり、独立ドイツ社会民主党からの大量の共産党加盟となったのである。かくて、急進派は、きびしい、独裁的な党として登場し、改良派は、まともではいるが、おんけんで不活発な党として登場する。他方、中央派は、党が一つになって内部抗争をつづけていたが故に存在意義があった事をしめし、二つの党に分裂するや、そのいずれにおいても影響力を失い、残存者は一九二二年に社会民主党に復帰した。

(3)

旧ドイツ社会民主党の分割された遺産の相続者は、Ledebourではなく、エーベルトとレーニンであった。社会主義と議会的民主主義を両立させようとした中央派の失墜は、その両立しがたいことを、雄弁に物語っている。

Beitar は時期的には、Schorske の扱った時期にひきつづいて、一九二一年までを扱っている。

- 第一章 ドイツ社会民主党の起源
- 第二章 エルフルト綱領から修正主義迄
- 第三章 ドイツ社会民主党と戦争の勃発
- 第四章 ドイツの戦時政策批判

一九〇五—一九二一年のドイツ社会民主党史

- 第五章 ドイツ社会民主党とドイツの戦争目的
- 第六章 ドイツ社会民主党と独立社会民主党
- 第七章 ドイツ革命の諸原因
- 第八章 ドイツ社会民主党とドイツ革命
- 第九章 制限された革命
- 第十章 内乱
- 第十一章 再考された社会主義
- 第十二章 ドイツ社会民主党と平和解決
- 第十三章 ゲーリッツ綱領
- 第十四章 結論

ワイマール共和国が社会主義の理想を実現できずに、ビスマルクの帝国と大してちがうところなくおわったのはなぜか？ 著者はこの原因をとくために社会民主党の急速な変質に問題をしぼり、こうした変質が、外的条件によってではなく、党の内的発展から生じたものであることを重視する。そしてこの観点から、社会民主党のかけられる経済プログラム、外交政策を検討し、これを論証しようとする。

第一—二章は、いわば一九一四年以後の社会民主党を知るための予備知識であるが、ここではつぎの点が注目される。

第一に、著者はラッサールの影響を非常に強くなり、ゴータ綱領がラッサールの影響をうけながら、一八七八年以後の実践において急激にマルクスの影響へと傾いたのは、ビスマルクの社会主義者取締

法の結果であるとし、一時的、偶然的なものとする。

第二に、エルフルト綱領の評価において、*わきの Schorske* 同様、革命主義的側面と改良主義的側面とをもつとする。そして改良主義的側面は、ラッサール主義の復活(注八)であり、社会主義者取締法のもとで一時期上げされたラッサール(注九)が、取締法の撤廃によって回復したという見解をとっている。

第三に、社会民主党は、戦争を資本主義の産物とみながらも、国家防衛の義務を説いており、植民地政策反対も、実施の仕方を問題にする態度が一貫していたという指摘。

第四に、修正主義が、実践の面で改良主義的諸政策を支持したのは事実であるが、それは偶然のことであり、修正主義は党の教義、改良主義のいづれからも区別される第三のものである。修正主義が主張するのは個々の戦術の変更ではなく、エルフルト綱領の基礎をなしている理論そのものの修正である。にも拘わらず、社会民主党の指導者および党大会は、これを戦術としてのみ理解し、しかもまちがった戦術としてこれを拒けたという見解(注九)。

第三章。ここでは、ラッサールの国家観の復活を重視し、戦争支持に態度を急変した理由の中、全独をおおった国家目的への大衆的熱狂の圧力を第一にあげている。八・四政策の弁護論は、一九一四年七月の外交交渉の経過を一面視することにより、戦争はドイツにとって防衛戦争であったとする主張を中心に、戦争勃発を有効にいとめる力がなかったという主張、戦争宣言を行なうのは皇帝であ

って議会ではないから、八月四日の投票は戦争支持をいみじなかつたという詭弁に近い主張等が展開された。著者はこうした弁護論の本質は国家利益優先の告白にはかならずとされている。

第四章においては、食糧問題、軍隊内部の不満の問題、少数民族と被占領国民の取扱問題、戒厳状態と検閲問題、民主的改良の問題、こうした一れんの戦時政策に対する社会民主党の批判の仕方と内容を検討し、つぎの点を指摘する。

第一に、こうした問題に対する批判を、社会民主党は愛国的義務に基づくものとして行なっている。例えば民主的改良の問題では、交戦国の宣伝の余地をなくし、国家に、より愛着をもちうるために、いい、軍隊内の改革問題では、士気こうようのためにという如くである。

第二に、政府支持を撤回することによって政府に譲歩をしいる企ては決して行なわれなかった。

第三に、政策決定の権力はしだいに軍最高司令部の手に移っていったが、社会民主党はドイツ休戦提案迄、失政の責任を、最高司令部に問おうとせず、それをさけた。

以上の点を指摘し、一九一四年八月四日の戦争支持決定は社会民主党の変質を決定的にし、批判も最高の国家的利益を実現するためのもものとなっていたことを明らかにする。

第五章では、社会民主党は八月四日の態度決定にさいし、労働者の死活の利益を守るための国家防衛をうたったが、領土拡張の野心、

賠償問題の態度、全ドイツ領土保持についてのゆるぎのない態度、併合主義そのものへの反対ではなく、外国での不評が戦争終結をおくらせるといふ理由で反対した態度、こうした態度と国家防衛のうたい文句との間に明らかに矛盾したものを指摘している。

第六章では、このように、国家の利益を優先させた八月四日以後の社会民主党の国家主義的態度と、これに不満で訣別した独立社会民主党の態度とを比較する。著者によると、国家防衛をみとめた点では両者共通するが、後者が人間性と正義に合致する真の国家目的を念頭にいたのに対し、前者が国家主義的な国家目的を主張した点に相違があった。さらに鋭い相違はそれを達成する手段の問題であり、独立社会民主党は、社会民主党の以前の革命的伝統(宣伝せんとく・ストライキ・革命準備)をうけついで。最後に著者は、よくいわれるように、一九一八年の革命と独立社会民主党との間に直接の関係はなく、革命は自然発生的なものであったとしている。

第七章、第八章では、ドイツ革命の原因と革命に対する社会民主党の態度を扱う。

著者は、革命の原因として、第一に敗戦のもたらした諸困難と、政府の無策、第二に、平和をねがう民衆を裏切る戦争けいぞく工作の発覚、第三に、休戦を妨げている政治改革の停滞の三点を指摘し、さらに、こうして発生した革命の特徴は、指導する中核を欠いたこと、軍隊の無抵抗、公務員の新政府への従順な服従にあったとする。では、社会民主党は革命にどのようなぞんだか。社会民主党

は、端緒となった退位問題にきわめて冷淡で、大衆を抑圧することが困難とみた時に、はじめて闘いに合流し、下からの革命に身を投じて、自分の目標のわく内にとじこめることに狂ほんした。著者は、下からの革命の大衆運動に対するこの社会民主党の態度を、ロシア革命のかけにおびえたためとみている。

第九章は、社会民主党のこうした参加の仕方に暗示される、革命の制約性について語っている。社会民主党は、ポリシエヴィキへの憎悪と、すべての政党との協力の意志をもって革命に突入した。社会民主党は、事態を暴民の攻撃的干渉のもとの内閣の危険とみていた。政治革命(徹底した民主主義)はあっても社会革命はなかった。これに反し、独立社会民主党と共産党は、民主主義の徹底だけでなく社会主義共和国を要求し、民主主義議會制度の代わりにソヴェト制度を主張した。十一月革命は *council movement* としての特徴をもったが、社会民主党は *Council* から政治的権力をとりあげ、国会に移行する事に全力をつくした。また事態を取捨するため最高司令部の支持を利用した。著者は、社会民主党の取捨方式実現を助けた要因としてつぎの点をあげる。

第一に、対独立ドイツ社会民主党闘争で決定的な力となった最高司令部の支持。第二に、行政機構と官吏の協力。第三に、連合国側は *Council* を交渉相手にしまいという宣伝。第四に、食糧危機解決の為農民の支持をえる問題、第五に、脱走兵、失業者の *Council* 等にもみられた行きすぎ。

第十章では、内乱と社会民主党を扱い、社会民主党の *Free-soops* を使ったの軍事的闘い、デマゴギーによる宣伝の闘いをつぎ、こうした手段をえらばぬ政権保持の為の左派圧迫が一九一八年以後のドイツの民主主義の運命におとした暗い影を指摘している。

第十一章では、革命の成果の乏しさに対する不満をそらすための経済会議制度の採用も社会主義とは無縁であったこと、および、戦争経済から平和経済への移行、賠償問題処理に直面し、社会民主党は社会主義方式を理論的にも実際のにも実現性のないものとして放棄し、生産増大の点で資本主義に効用を見出すに至ったことを明らかにしている。そしてこの時期の、最大の収穫が、政府の統制のわく外で行なわれた、四大労組と二一の産業協会との間の広汎な協約であったと結んでいる。

第十二章では、休戦協定、平和条約を通じ、社会民主党が戦時中の国家主義的政策を引ついで、あらゆる形で反対運動を展開し、このために第二インターの組織まで利用したことを明らかにしている。

第十三章では、一九二一年に採択された *Goettis* 綱領は、変化した党政策に応じた理論の展開の必要性と、独立社会民主党との合同促進という政治的配慮の産物であるとす。

第十四章では、以上に展開された分析を要約し、さらにつぎのように結んでいる。^(註一〇)

「結局社会民主党は、一九一八年以後ドイツが直面した、旧勢力と

(4)

以上に紹介した二人の著者は、共通して、社会民主党分裂の要因を、一時的、外部的なものとしてではなく、長期的、内部的なもの展開として扱っている。即ち、*Schorke* は、時代への適応性を失った社会民主党の伝統的政策(これをエルフルト綱領の中にみる)に対する、左右からの挑戦の結果としてみるし、*Berlan* は、一九一四年以降の社会民主党の諸政策が、外的条件や、戦術的護歩ということでは、説明できぬ、根本的な変質をしめしていることを論証することによってこれを明らかにしようとしている。この点、*Schorke* は、分裂の経過を説明するのに、かなり成功しており、とくに、社会民主党の機構の具体的分析によって、改良主義が党をとらえてゆくプロセスを明らかにしたことは、貴重な成果といえる。また、*Berlan* の場合も、戦争支持にふみきってからの社会民主党の諸政策の分析を通じ、「変質」の内容とふかさを明らかにしており、著者が希望しているように、この著作は、社会民主党の歴史に対する理解だけでなく、ワイマール共和国の理解をふかめるのに貢献している。

このことを念頭においたうえで、両者の著述にみる、方法論について考察し、本稿を結びたいと思う。結論的にいえば、社会運動を扱う場合、社会・経済構造の分析を欠いた、両著書の方法についての疑問である。(2)の紹介をおしてもわかるように、*Schorke* は、

極左との間の、不幸な二者択一から脱する第三の道を用意することができなかった。ディレンマから脱する第三の道を示すかわりに、党がその伝統的な綱領の本質部分を拒み、必要とされた政治指導を準備する事に失敗した事は、社会民主党の失敗にほかならなかった。即ち党は、ドイツ共和国のその後の歴史をそこなった。」(S. 30.)

(注七) *Berlan* はコロンビア大学の人が詳しくはわからない。

(注八) 著者は、ラッサール主義の復活を強調しているが、コールも指摘するように (*Ibid.*, p. 252) プルジョア諸党とのていけい無差別に批判してマルクスから批判されたのも、ラッサールであり、国家主義的傾向の抬頭という点から、直ちにラッサール主義の復活と断定するのは、疑問である。

(注九) *Schorke* は叙述のうえで、修正主義と改良主義をげんみつには区別せず極めて恣意的であるが、*Berlan* は、この区別を強調する。Geyも区別の必要を強調している。

(注一〇) コールは、社会民主党の誤りを現実を直視しなかったこととにみている。即ち、かれらは国会で多数をえて政権を奪取できると考えていたが、そのためには浮動票をつかまなければならぬという困難な問題をみなかった。また党支持者の中に、社会主義の革命的精神をふきこむことを怠った事も重視している (*Ibid.*, pp. 320-321.)

年	と比	
	得票数	組合員数
1890	6	1
1893	8	1
1898	4	1
1903	3	1
1907	2	1
1912	2	1

(同書12-3頁より筆者作製)

たという事実だけであって、ここから因果関係までは説明できない。むしろ、こうした対応関係そのものを問題にし、当時の社会経済構造が労働組合運動の性格に与えた投影と、これに対する社会主義政党の現状認識および運動プランの分析を通じ、因果関係の有無あるいは両者の関連が解明されなければならない。

同様に *Schorke* は革命的戦術と改良的戦術を、激しい闘争形態をみとめるかどうかという問題に形式化している点がある。いかなる戦術といえども、一面では、政治的、社会的ならびに経済的な実体に対する一定の認識を前提とするものであり、他面では、戦術を通じて達成しようとする目標と切り離せないものである。とすれば、戦術が前提している実体に対する認識を、運動の結果(目標に近づいているかあるいは遠のいているか)によって検証してゆく中で、革命的戦術・改良的戦術の問題は内容的に明らかにしてゆくことが必要となる。右の二つの例にしめされるように、社会・経済構造の分析の欠如は、著者が、社会主義運動と労働組合運動の、革命

的戦術と改良的戦術の、二律背反という仮定、改良主義が問題となるときまづ用いられてきたこの仮定そのものを問題にすることなく、暗黒のうちにこれを見とめ、自明のこととした事と結びついている。

Bertan の場合について、一つだけふれると、かれは第一次大戦を契機とする社会民主党の国家主義的傾向の中に、一八七五年に党が合流して結党されたさいの、一つの潮流たるラッサール主義の復活をみ、これを強調している。しかし一八六四年に死んだラッサールの時代の国家と、独占資本の段階に入り、帝国主義戦争の立役者として登場した時の国家とは、その基礎となっている社会経済構造も、それを支持する社会層も全く異なっている。それを同じ目で、

ラッサール主義の復活としてみたのでは問題は解明されない。むしろ、こうした国家主義の再興を変化した政治・社会・経済構造の基礎のうえにとらえることによって、当時の社会民主党の変質が内容的に明らかにされるであろう。

社会運動は政治と経済の結節点である。政治と経済の規定関係、相互関係を検証してゆく好個の分野である。このことの複雑さ、困難さは大きいとしても、こうした認識のうえに、あらためて方法論を再検討する必要がある。

(注一) Schorske, *ibid.*, pp. 13-14.

書評及び紹介

カール・ハイニンツ・ライディヒカイト著

『ドイツ労働運動におけるウィルヘルム・

リープクネヒトとアウグスト・ベーベル』

(Karl-Heinz Leidigkeit; Wilhelm Liebknecht und August Bebel in der deutschen Arbeiterbewegung, 1862-1869, 1957.)

„Mit Preußen gegen Deutschland oder mit Deutschland gegen Preußen“
—— Wilhelm Liebknecht ——

本書は、ライプツィヒのカール・マルクス大学ドイツ史研究所 (Der Institut für deutsche Geschichte an der Karl-Marx-Universität Leipzig) のヘルムスト・エンゲルベルグ教授 (Prof. Dr. Ernst Engelberg) の編集による研究叢書の第三巻にあたるものである。すでに第一巻には、トーマス・ホーレンの伝記的研究、「フランツ・メーリングとそのマルクス主義への途」(Thomas Höhle; Franz Mehring, Sein Weg zum Marxismus, 1869-1891) 第二巻にはハンス・ハイエルの「十一月革命からシエンホーンにおけるソヴェート共和国」(Hans Beyer; Von der November-

revolution zur Räterepublik in München) 第四巻はウォルター・スモーガールの「ドイツ労働者青年運動の最初の十年」(Walter Sieger; Das erste Jahrzehnt der deutschen Arbeiterjugendbewegung, 1904-1914) 第五巻は第一巻の続きで「ヨーゼフ・シュライフシュタインの「フランツ・メーリングとそのマルクス主義的創造」(Joseph Schleitstein; Franz Mehring, Sein marxistisches Schaffen, 1891-1919) などの五巻が出ており、これらはマルクス主義の方法論の上に立つ独創的なユニークな研究であると同時にドイツ労働運動史研究の最近の成果を示すものとして注目に値しよう。

本書は、著者が「はしがき」においてのべているように、「ウィルヘルム・リープクネヒトとアウグスト・ベーベルが、一八六二年から一八六九年の時期に、ドイツ労働運動が独立の労働者政党への発展において果たした影響の探求と記述をもって、ドイツ労働運動の革命的伝統の描写において、自分にできる限りの寄与をするという課題においてとりかかった」とのべているように、従来まで、比較的、研究の少なかった黎明期のドイツ労働運動と社会主義についての労作である。本書は、つぎのような内容から成っている。

序文、第一章 ドイツ労働者階級の進歩的部分のブルジョアジーからの分離、第二章 全ドイツ労働者協会の方向転換、第三章 労働者教育協会の発展と一八六五年までのアウグスト・ベーベル、第四章 小市民的民主主義と労働者協会、第五章 マルクスおよびエ